

金融資産 形成術



資産形成を行うリスク と行わないリスク

第8回

合同会社フィンウェル研究所 代表 野尻 哲史

意外に多かった私生活におけるリスク

投資のリスクを説明することはよくあります。「リスク」をそのまま危険と読んでその度合いと考えると、投資の世界では通用しません。投資の世界でのリスクとは、収益率のばらつきの具合を言います」なんて言い方をするかと思うのですが、どうでしょう？しかしこれは、一般の消費者の腹に落ちにくいものだと思います。

一般にリスクという言葉は、やはり「危険」の度合いという意味で使われることが多いからでしょう。人生にはリスクがついて回ります。私の場合、30代前半に勤務した山一証券経済研究所ニューヨーク事務所は、9.11テロで消滅したワールドトレードセンター第2ビルの98階にありました。山一証券が自主廃業していなければ、きっとあの時、あのオフィスで勤務していただろうと多くの元同僚に言われました。1995年にニューヨークから帰国した時も、入社初日は地下鉄サリン事件が起きた日でした。地下鉄東西線で西船橋方面からオフィスに向かったのは、その後負債の返済に苦しむことになる船橋のマンションがあったからでした。こうしたことはまさしく「危険」という意味のリスクですが、これは投資のリスクとは異なることをどうやって理解してもらえばいいでしょうか。

「投資のリスク」をどう説明するか

投資のリスクをどう説明するのがいいでしょうか。

私はできれば、次の3つの理解を進めるようなアプローチがいいのではないかと考えています。

- ① 「投資のリスク」ではなく、「資産形成のリスク」を伝える
- ② 標準偏差によるリスク説明ではなく、目標を達成できる可能性と信頼度に置き換える
- ③ 「資産形成を行うリスク」と「行わないリスク」の比較をする

まずは投資と資産形成の違いです。投資の経験がある方に対して「投資のリスク」という言葉を使えば理解されるかもしれませんが、そうした方は、「投資のリスク」を標準偏差とか、目標値に対するばらつきのみで説明しても、分かっていたでしょう。

「投資のリスク」から「資産形成のリスク」へ

しかし投資初心者とか、投資をすべきかどうか迷っている方に対しては、「投資」よりも「資産形成」という言葉を使った方がいいように思います。すなわち「資産形成のリスク」といった表現を使う方が分かりやすいように思います。まだまだ「投資」をギャンブルと思っている方が多くいらっしゃいます。これはある意味で過度な深入りを抑止する効果があると思いますが、必要な方が躊躇する理由にもなっているはずです。そこで「資産形成のリスク」という表現で、より目標を軸にしてリスクを説明する方法に切り替えるのです。

「投資のリスク」を紹介するときには、常に年率換算した平均と標準偏差を使います。これは長期保有を前提にしているとはいえ、単年の変動を議論の対象にしています。そのため、リスクという言葉が「損をする」、「元本がなくなる」という結論に結び付きやすいのです。

また「投資」という言葉よりも「資産形成」という言葉の方が安心感をもたらすように思います。これは単に語感から来るものだけではないと思います。

「投資」と「資産形成」の違いは、「資産形成」が資産を作り上げるという目的を表している言葉であることに対して、「投資」はその手段を示

している点が重要です。目標額を設定してそれを達成するのが「資産形成」で、そのためには銀行預金などの貯蓄を使うこともありますし、有価証券への「投資」も含まれます。「投資」は「資産形成」を行うための一つの手段でしかないのです。一つひとつの投資商品のリスクをばらつきで議論するのではなく、それをポートフォリオにして目標額に対する達成の可能性を評価する方法にすることです。

「目標達成の信頼度」として伝える

具体的には、例えば、20年後の目標とする資産額を1500万円と想定したとします。提案する資産形成の方法であれば、平均で2000万円を達成できるが、10%の可能性で1500万円を下回るといったリスクの表現です。これは“資産形成の成果がゼロになってしまう”といった誤解に基づくギャンブル性をしっかり否定できますし、90%の可能性で目標を達成できることが分かります。モンテカルロ・シミュレーションなどのような発生確率を検証するシミュレーションを行う必要がありますが、より分かりやすいリスクの説明につながるのではないかと思います。これを海外ではコンフィデンス・レベルといった言い方をします。この場合、90%のコンフィデンス・レベルといいます。日本なら「目標達成の信頼度90%の水準」といった表現でしょう。

「資産形成を行うリスク」と 「資産形成を行わないリスク」

これができれば、次のステップは「資産形成を行うリスク」と「資産形成を行わないリスク」の比較です。まずは「資産形成を行わないリスク」です。かなり概念的な話ですが、これまでなかなか説明することはなかったと思います。若年層にとって40～50年先の生活を考える時には分からないことが多すぎます。しかし、安心だと思っている人は少ないでしょう。冒頭に説

明したような身の危険といったリスクでなくても、多くの方が「資金不足で厳しい老後生活を強いられるリスク」を懸念しているように思います。その端緒が、「老後2000万円問題」に対する反応ではないでしょうか。この議論が盛り上がる中、セミナーへの参加者が増え、証券口座の開設者が増えたといった指摘もあります。これこそ「資産形成を行わないリスク」を認知している人が多い証左といえます。

それと「資産形成を行うリスク」を比較する考え方を紹介することが、ファイナンシャル・アドバイザーとしては重要な出発点になると考えます。大事なことはこの2つのリスクの違いを理解することです。「資産形成を行うリスク」というのは突き詰めれば「投資のリスク」ですから、長期投資、分散投資、積立投資でそのリスクの軽減を図ることが可能です。これはファイナンシャル・プランナーの方であれば特に説明する必要もないでしょう。

しかし、「資産形成を行わないリスク」は、軽減の方法がなかなか見当たりません。自分の老後の生活費が足りない時に自分でできることは、できるだけ長く働くか、生活コストを切り詰めるくらいしかないのです。高齢になってからでも長く働けるかどうかは、若いうちには何とも言えないでしょう。同様に生活コストもインフレの状況さえ予測できませんから、若い時代から想定することは難しくなります。もちろん、子どもに頼る、親からの遺産（住むところも含めて）に頼るといった方法もありますが、信頼度は高くありません。

すなわち「資産形成を行わないリスク」はなかなか自分でコントロールできないものですが、「資産形成を行うリスク」はかなりコントロールできるものです。ここからリスクをコントロールできるからこそ、資産形成に一步踏み出せるはずなのです。

のじり さとし 1959年生まれ。2007年よりフィデリティ退職・投資教育研究所所長を続けながら、2019年5月に個人の立場で情報発信するフィンウェル研究所を設立し代表就任。データを基にお金との向き合い方に関する提言を行い、啓発活動を行う。日本証券アナリスト協会検定会員、日本FP学会、行動経済学会などの会員。著書には「定年後のお金」（講談社+α新書）、「脱老後難民 英国流資産形成アイデアに学ぶ」（日本経済新聞出版社）など多数。